



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	戦後日本の保守主義の研究：福田恒存と江藤淳の考察を中心に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	村部，貴浩
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第16319号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95247
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	MURABE_Takahiro_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：村部 貴浩

学位論文題名

戦後日本の保守主義の研究―福田恒存と江藤淳の考察を中心に―

本論文は、保守主義が政治思想として定着しがたいとされる日本の近現代史、とくに戦後日本における保守主義思想について、福田恒存と江藤淳という二名の知識人を中心に検討することを目的とする。

論文は序章を含む全六章からなり、まず序章では、戦後日本の保守主義をいかなる視点から問題にするかという問いの所在が語られる。それは端的には、保守すべき伝統がすでに自明ではないところで伝統の保守を語るという「逆理」であり、またとくに保守主義が政治思想として定着しがたい（その意味で「逆理」がより深刻に現れる）日本の保守主義の特殊性である。

本論部では、まず第1章で福田の思想について、とくに「一匹と九十九匹と」にみられる「政治」と「文学」の関係から、彼の個人観を中心として検討している。第2章では江藤の思想について、もともとは政治の過剰を警戒し個人の重要性を論じていた江藤がアメリカ体験を経てその思想を変容させていく過程を分析する。第3章ではふたたび福田の個人観について、その清水幾太郎批判を中心に検討され、第4章では江藤「成熟と喪失」を中心として「父の原理」と「母の原理」について論じられる。第5章は以上の考察を総括して、福田と江藤の思想的な共通点と差異について整理がなされる。

福田は、戦後の進歩派絶対優位の思想的状況下において、丸山らの進歩主義者をその批判の俎上に載せていた。そのため、「保守」に相対する思想を有する側から反動的な思想家と評されることもあったが、この見方は福田の思想の表面的な部分しかみていないだろう。福田の思想は、実際には保守カリベラルかといった二項対立で推し量ることができず、思想的マージナル・マン（境界人）としての思想的性格がみられる。

福田の「個人」重視の思想性は、戦後すぐに記した1947年（昭和22年）の「一匹と九十九匹と」においてその萌芽がみられる（第1章）。また福田は1980年（昭和55年）の「近代日本知識人の典型清水幾太郎を論ず」において、清水幾太郎の国家観が、個人を抑制させる個人なき国家観であることを批判し、かつてと同様に「個人」重視の思想を展開した（第3章）。このように、保守主義の思想が一般に1960年代以降の高度経済成長期以降、従前の「個人」重視の思想から徐々に「国家」重視の思想に移行していくなか、福田は80年代に入っても「個人」を重視する点で保守として特異な思想であった。

続いて本論文のもう一つの主題である江藤淳は、60年安保騒動の頃までは進歩主義者の思想的共鳴者とみられる思想的立ち位置であったが、1962年（昭和37年）から1964年（昭和39年）までのアメリカ留学において、明治のナショナリズムの価値を見出し、帰国後の1967年（昭和42年）に「成熟と喪失」にて「治者」としての生き方を説いた。この評論により、江藤は、保守主義者へと思想的変容を遂げたといえる（第2章）。江藤の思想に特徴的なのは、従前の保守派も戦後日本における「父の原理」である「国家」の不在を喧伝していたが、江藤は「母の原理」の不在を問題視したということである。彼はその不在が日本社会の成熟のためには好機であるともとらえ、「治者」としての生き方によって、「母の原理」の不在を克服しようとした（第4章）。

江藤は「治者」を具体的にイメージできる時代として明治時代に着目し、「父の原理」を具体的にあらわしたものとして、漱石をはじめ明治の文学を重視した。江藤は明治の文学者たちを文学者であると同時にナ

ショナリストとしてもとらえ、漱石に代表される「明治の文学」に文学とナショナリズムの結節点を見出すと同時に、そこに「治者」としての生き方の具体的なイメージを見出した。江藤は、『成熟と喪失』以降、「治者」という「父の原理」を推し進めていく。江藤がこの「治者」の概念を唱える根底には「戦後」体制への懐疑があり、ひいてはその根幹をなしているアメリカによる戦後日本の占領政策への批判がある。

以上の考察の全体を踏まえて、結論部である第5章では両思想家の共通点と差異を整理した。この両者の共通点は、制度的な保守が困難な日本、とりわけ戦後日本において、政治をはじめ社会科学的なアプローチでは実現がむずかしい保守思潮を、「文学的センス」により人間の精神のありようとして、従前の保守主義者にはなかった思潮を実現したということである。しかし他方において、この両者には抜きがたい思想的な対抗があり、その思想的な論点は以下の二点に集約される。

両者の一つ目の相違に国家観・個人観の違いがある。江藤が有する「治者」の概念は、その前提条件として、「治者」と「被治者」の関係があり、「治者」たり得るためには強い「国家」の存在が必要である。江藤に対して福田も「国家」への忠誠心を示してはいる。しかし、福田は、江藤のように「自分を越えたなものか」をイコール強い強制力をも伴った「国家」とするような国家観を有していない。すなわち福田は、「国家」という具体的で目に見える制度的全体性を重視すると同時に、それだけでは回収し得ない「良心」という不可視で抽象的なものも重視している。それが息づいた存在として、職人や農民という生産者が挙げられるだろう。生産者の生においてはモノや技術という具体的なものを介して「連続性、一貫性」が保たれているといえる。このように福田は国家制度の具体性ととともに、あるいはそれ以上に「モノや技術」の具体性を重視したといえることができる。この国家観・個人観の違いは、両者の思想性を隔てる非常に大きな相違点である。

両者の二つ目の相違に歴史認識の違いがある。日本の保守派は、一般に戦前の日本の立場に積極的な意義を見出している。江藤も「明治」の時代を理想とし、戦前の日本に肯定的な点では一般的な保守派と大差ない。それに対して福田は、強固な「個人」が確立されてこなかった「戦前」という時代にたいしてきわめて懐疑的、批判的である。これは単に両者の「戦前」「戦後」観の違いということだけにとどまらず、保守主義において理想として想定する具体的な時代設定は可能かという大きな問題に関する立場の相違を示したものであることができるだろう。